

2026年度三重大学大学院人文社会科学研究科（修士課程）入学試験問題
試験科目 [外国人留学生特別入試・小論文]

次の文章はデモクラシーについて論述したものである。この文章の内容をもとに、下の問に答えなさい。

2年3組では、文化祭のクラス企画を決める際に、1組や2組とは異なるやり方を採用した。このクラスでも、最初は2組と同じように、この問題を決めるのに「最もふさわしい」人々で決めようとした。しかし、いざそうしようとする、「どうしてその人たちで決めるのか」「私もそのメンバーに入れてほしい」という声が出てきた。そこで、このクラスでは、クラス全員の選挙によって、定員5名の「文化祭クラス企画検討会議」の委員を選出することにした。クラス企画は、こうして選ばれた5名の委員によって決定される。

このような決め方を「代表を決める」方式(代表制)と呼ぼう。これも、デモクラシーのバリエーションの1つである。この方式では、「みんな」の中から「みんなの代表」を選び、その人たちの協議によって決定を行う。「みんな」が直接に決定に関わるわけではない。しかし、当該の問題について、「ぜひ自分に代わってこの問題を検討してほしい」と「みんな」が考える人々を、選挙という手続きを経た代表として決めることができる。この代表は、「みんな」が選んだ代表であり、だからこそ、代表による決定の正統性は高いと期待できる。選挙のあり方について「みんな」が納得している限り、これもまた、「みんな」のことを「みんな」で決めるデモクラシーの1つのタイプである。

ここでは、代表制が望ましいとされるいくつかの理由について説明する。理由の第1は、代表制は政治的平等をより実現できる仕組みだから望ましい、というものである。政治的平等とは、第1節で述べたように、「みんな」が等しい発言権あるいは参加権を持っていることを言う。一般にデモクラシーでは政治的平等が達成されるべきである。しかし、既に見た

ように、「自由に意見を伝える」(集団理論)や「関係者を集める」(コーポラティズムなど)の場合には、政治的平等が必ずしも達成されず、「一部の」「特定の」人々の声しか届かない可能性がある。これに対して代表制の場合には、1人1票の原則を適用することで、代表選出を通じた政治的平等が達成されることになる。

第2の理由は、代表制によって「多数者の専制」あるいは「衆愚政治」を避けることができるから、というものである。デモクラシーへの危惧は、教養がなく適切な判断力を持たない多数の民衆によって政治が支配されてしまうことへの懸念として、しばしば語られてきた。特にその時代のエリートたちは、そのような「多数者」によるデモクラシーによって、自分たちの立場が侵害されることを恐れた。

そこで、デモクラシーそのものは認めるとしても、それを「賢明な」代表が行うことが重要とする考え方が表れた。この考え方を最も端的に表明したのは、経済学者のシュンペーター (Joseph A. Schumpeter, 1883-1950)である。シュンペーターによれば、一般民衆は具体的な政治争点についての十分な知識も判断力も持っていない。したがって、「自分たちのことを自分たちで決める」というデモクラシー理解は、改められなければならない。それは、人々が自分たちの支配者になる人を認めるか拒否するかを選択の機会のこととして、理解されるべきなのである。これは、「デモクラシー=代表制」の端的な表明であった。

代表制を望ましいとする理由の第3は、「デモクラシーの魅力のなさ」への対応策として、というものである。デモクラシーとは「みんなのことをみんなで決める」ことであって、「わたしのことをわたしが決める」こととは異なる。このようなデモクラシーの性質が、その「魅力のなさ」につながる。なぜなら、そこでは、「わたし」とは異なる他者の意見や利害を踏まえなければならず、それゆえその結果は、「わたし」が望むような結果になるとは限らないからである。その結果、デモクラシーに関わることは、ストレスフルな経験となりやすいし、その経験や結果に大きな幻滅を感じることもあるだろう。これは、経済における購買・消費活動とは大きく異なるデモクラシーの特徴である。

しかし、デモクラシーの魅力のなさという性質から、代表制の意義を導き出すことができる。つまり、「わたし」は代表を信頼して意思決定を任せることで、デモクラシーという「魅力のない活動」を回避することができる(ただし、だからといってすべての問題の決定を代表に任せればよいというわけではない)。だからこそ、代表制は望ましい。

「代表を決める」方式には、「代表は本当に『わたしたち』を代表しているのか」という疑問が付きまとう。かつて、フランスの思想家ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78)は『社会契約論』の中で、イギリス人が自由なのは選挙の時だけで、議員が選ばれた後は奴隷となってしまう、と述べた。このルソーの指摘は、代表は本当に「わたしたち」の代表なのか、という問題を提起している。

この問題は、20世紀後半以降、政党と有権者・支持者との乖離の問題として議論されてきた。かつて政党は、社会の中のある特定の属性を持った人々のまとまりを代表するものと考えられてきた。具体的には、「労働者」を代表する政党、「農民」を代表する政党、「資本家・経営者」を代表する政党、キリスト教の「カトリック」を代表する政党、といった具合である。有権者は、自らの社会的属性に基づいて、それに対応した政党を支持する。この場合、政党が「労働者」「農民」「カトリック」などの代表であることは、比較的分かりやすい。

しかし、このような有権者と政党との関係は、大きく変化している。現在では、それぞれの政党がどのような社会的属性を代表しているのかは、分かりづらくなっている。政党は、特定の属性を持った人々ではなく、できるだけ多くの人々にアピールしようとする。そのために、政党は、世論調査や広報の専門家の助けも借りて、広範な有権者にアピールできる政策やスローガンを、その都度考えようとする。その際には、イメージ戦略も大切になる。そこで、各政党は、リーダーの役割を強調し、リーダーの個人的なイメージによっても支持を獲得しようとする。このように、政党は、特定の社会的属性を持った人々と固定的な関係を築き、それらの人々の社会的利害を代表するのではなく、社会の多様な人々との間に、その都度のアピールやイメージを通じて一時的な関係を構築する存在へと変化しつつある。

問題は、このような政党の変化が、人々に「わたしたちの代表」という認識を持ちづらくさせるという点である。広範な人々にその都度のアピールやイメージで訴えかける政党は、その都度の選挙では多くの支持を獲得できるかもしれない。しかし、それはいったい誰の代表なのだろうか。「みんなの代表」に見えるものは、実は誰の代表でもないかもしれないのである。こうして、「代表は本当に『わたしたち』を代表しているのか？」という問題が、今日の代表制をめぐる大きな問題となっている。

(出典：田村哲樹著「デモクラシーを考えてみよう——「みんな」で決める複数のやり方」永井史男・水島治郎・品田裕 [編集]『政治学入門』（ミネルヴァ書房、2019年）154～157頁を一部改変)

問

代表制が望ましいとされる理由をまとめなさい。また、有権者と政党の関係がどのように変わったのか、および、その変化が代表制にとってどういう意味をもつかをまとめなさい。あわせて、600字程度で記述しなさい。